

肌色の分類における境界線の知覚に関する研究

Recognition of the classification of skin color gradation

主 雅楠 (Ganan O) 指導：齋藤 美穂

1. 目的

化粧品業界では、日本人の肌色の色相は、ピンク系、ナチュラル系、オークル系の3つのグループに分類するのが一般的である。しかし、小林(2002)は肌色の分類に関して、各分類の中間層の処理は極めて曖昧なものであると述べている。このような、肌色の分類における境界線に関する報告はほぼ皆無である。本研究では、肌色分類における境界線の知覚に関して、その定義を明らかにすること、それをもとに、肌色分類システムを構築することを目的とした。

2. 研究 I

肌色領域分類の判断が曖昧な肌色に対して、その分類における境界線を検討した。刺激の構成は1YR⁻9YR (色相)、V4.5⁻V8.5 (V:明度)、C3⁻C5 (C:彩度)であった。予備実験で抽出した判断が曖昧な肌色刺激187色を用いた。方法としては、20~38歳の男女100名(男性52名、女性48名、平均年齢24.9歳 SD: 4.48)にピンク系とナチュラル系の境界(以下「ピンク系境界線」)およびナチュラル系とオークル系の境界(以下「オークル系境界線」)をそれぞれ調整法により選択させた。

その結果を元に、明度(9)×彩度(3)の27通りの組合せについて、色相のピンク系境界およびオークル系の境界となる色を抽出した。

境界線について、明度および彩度を要因とする1要因分散分析をそれぞれ行った。その結果、いずれも有意な主効果が見られた($p < .001$)。多重比較の結果、高明度は赤みに寄って知覚されることが示唆された。Bartleson^[1]と兎玉^[2]は、肌色に対する記憶色は高明度、赤み寄りであることを指摘したが、本研究の結果でも、肌色分類における境界線の認知は肌色に対する記憶と関連性があると考えられる。

以上の結果より、曖昧な肌色をピンク系、ナチュラル系、オークル系という3グループに分類することが可能であることが示唆された。

3. 研究 II

肌色分類の3グループにおいて、それぞれの明度彩度の組合せについて印象評価を行い、各グループについての印象の違いを検討した。

刺激は肌色領域に属している明度彩度の組合せ4組×3グループ、計12刺激を選定した。20~39才代の男女100名(男性49名、女性51名、平均年齢26.7歳 SD: 3.50)がAVタキストスコープの視覚刺激呈示用CRTモニタを用い、SD

法20形容詞対5段階尺度による印象評価を行った。

全刺激におけるイメージプロフィールの結果から、3グループのいずれも、中明度の肌色はネガティブなイメージを持たれ、高明度の肌色はポジティブなイメージを持たれた。因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果から、3グループの代表肌色に対する印象はスキントイブ因子、エレガント因子、アクティブ因子の3つの要因により説明できることが示唆された。

本研究では、中明度は非常に色黒と判断され、高明度は非常に色白と判断された。先行研究の鈴木(1997)による、肌色の見え方に関して、色白-色黒が明るさに関係するという報告と一致した。

4. 研究 III

3次元空間で肌色分類システムの構築を試みた。さらに、3グループに対する印象評価の結果を肌色分類システムに導入した(Figure 1)。

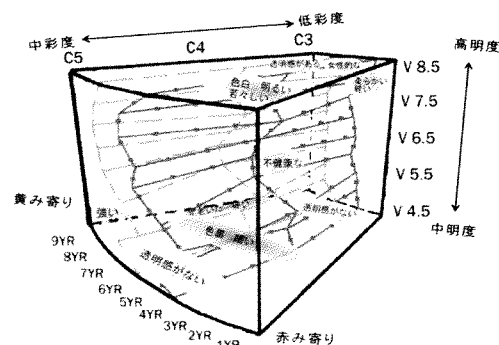


Figure 1 肌色分類システム (形容詞反映)

5. 結論

本研究では肌色の境界線および印象評定のデータに基づき、印象を反映させた肌色分類システムを構築することができた。また、肌色に与える明度の影響が顕著であることが再確認された。本研究の成果は、コンピュータ上でのパーソナルカラー診断の環境整備に貢献することが期待される。

6. 参考文献

- [1] C.J.Bartleson. (1956). Some Observations on the Reproduction of Flesh Colors. PS & E,
- [2] 兎玉晃 (1970), 膚色の実際とイメージ, テレビジョン学会編, 測色と色彩心理, 454-455
- [3] 小林政司 (2002), 「似合い」の様相-被服の色彩に関して. 大阪障蔭女子大学編集第39号, 117-128